
エチュード3：空を飛べたら

なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エチユード3：空を飛べたら

【Nコード】

N4316L

【作者名】

なつき

【あらすじ】

「空を飛ぶんだ、と君は言った。何て陳腐な台詞だろう、とそのときは辟易して、わたしはうん、と返したきりだった。でも、

こうして大空を、前にすると。」

空を飛ぶんだ、と君は言った。何て陳腐な台詞だろう、とそのときは辟易して、わたしはうん、と返したきりだった。

でも、

こうして大空を、前にすると。

わたしはすれすれに立っている。わあっと空は広がっている。青が、目に痛い。コンクリートの崖つぶち。一步踏み出せば、そこは風の世界。つま先の向こうには、街が在る。カラフルな街並みは、しかし一種の静けさをもってそこに在る。秩序の世界。

そう、わたしは秩序の世界に住んでいる。決められた毎日、やるべきことのある日常。そしてわたしはそれらを愛していると思うし、だから無秩序に生きる君を見下してもいたんだ、だって余りにも、それは馬鹿らしく思えたから。

風を受けて、わたしは思う。

君は確かに詩人だった。自分でもその名を欲していたし、わたしにもそう呼ぶことを要求した。でも君は、陳腐な詩人だった。ありふれていた。どこにでもいた。オリジナリテイもアイデンティテイも何もない。それは単なる、モラトリアム。そのことに気がついてなかったの、ねえきつと君だけだったよ。わたしは幾度も同情した。軽蔑もしたし閉口もした。時には君を見下して安心したよ。でもたまに、ほんとうにたまに、わたしは君に憧れた。

ふうつとバランスを崩せば、わたしはふわりと宙に浮く。それは一瞬のことですごくすごく馬鹿げていること。そう君は確かこう言った、

『時というのは自分次第でその長さを変えることが出来るんだ』

馬鹿みたい馬鹿みたい、やっぱり君は馬鹿だよ、時っていうのは絶対的で、どこまでも絶対的で残酷で、そんな主観でどうこう出来るものじゃなくて、わたしはそう言ってやりたかったけど、止めた。

君が、怖かった。

そんなとち狂ったことを平気で言える君の、得体が知れなかった。君はぜったい、狂人だよ。それはわたしが保証する。だって君は、現実が見えていなかった。空を飛べるだなんて妄想、本気で、信じて、そして、じっさい、

君はいつて、しまったのだから。

ああやっぱり、やっぱり君は！ その知らせを聞いたとき、わたしは自分の正しかったことを知った。君みたいな人間は、きつと自分のなかでしか生きられない。社会とか常識とか、そういうのには決して馴染めない。だから、良かったのかも知れない。

でも、わたしは、やっぱり君のこと馬鹿だと思う。

そのせいで、満足に歩けなくなってしまったじゃあないか。駆けることだって出来ない。君はいつでも足を引きずって、それが宿命みたくなって、

わたしは耐えられないんだ、自由で無責任であるべき君が、そんな姿でゆっくりと、這うような速さで進んでゆくのは。

ああ、でも、わかるのかも知れない、わたしには！

空はあまりに青すぎる。吸い込まれそうな青をしている。吸い込まれてしまいそうだ。くらっと、ふらっと……

わたしは頭を振る。駄目。それでは君の、二の舞だ。でも何でどうして、空はこんなに青い、どうしようもなく、青い。

「危ないよ」

振り向くと、君がいた。意地の悪い微笑を、うつすらとたたえて。

わたしは今の気もちを、率直に言葉にした。

「ねえ空が、こんなに青いの理不尽じゃない？」

「陳腐」

からかうように言われて、いらっとした。

君はなおも、陰のある、しかし楽しそうな微笑を崩さず言う。

「言葉にすると、陳腐なんだよね。この言葉自体がもう、陳腐だったりしてね」

小さく声をたてて笑う君に、一種の反発と意地悪心をもって言う。
「じゃあもう、何もかもが陳腐じゃないか」

「いや？」

君はもったいぶって言う。

「私は、陳腐じゃないよ。だって」

風が、すっと息を吸った。

「だって、空を飛んだんだもの」

君の背から、風はうまれ出た。

わたしは風の力に、バランスを崩す。危うく倒れそうになるところを、君はよたよたと駆け寄って、わたしの腕を掴んだ。

君は真剣な瞳をして言う。

「陳腐で良いんじゃないの？ 陳腐でなくて良いことなんて、あんまり無いよ」

「……ねえ、わたし達って、どっちが幸福なの」

「知らない」

絶望的だ。絶望的に、陳腐。そして陳腐さから抜け出す方法は、しかし、

「まあ、深く考えないほうが良いよ」

そう言って笑う君は、でも、やっぱり、陳腐に見えるよ。

「……理不尽」

「そんなもんだよ」

相変わらず、空は青かった。くらくらする。倒れてしまえそう。

しかし、それは、

「帰ろう」

もはや呆然としているわたしを、君は優しく促してくれる。わたしはすこし沈黙したあと、頷いて、空を背にした。背に当てられた君の手の温かさが、やけに気になった。

わたしが見ていない間にも、空は確かに青色だったらしい。それは陳腐で理不尽なことだと、やっぱり、思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4316/>

エチュード3：空を飛べたら

2010年11月12日15時28分発行